

気仙沼地方の民話

気仙沼市史編纂室

川島 秀一

北上山地の累々とした山脈が、そのまま大洋へ雪崩落ちた所、そんな地相の一つに気仙沼地方がある。森林地帯の谷間には多くの山村を形成する一方、海岸線も複雑で、数々の入江と磯を持ち、湾内に大事そうに一つの島（大島）を抱えている典型的なリアス式海岸である。気仙沼地方そのものが閉鎖的な立地であるのに加えて、内部にも独立した地形が点在する。この地方に伝わる昔話や伝説も、谷を一つ越え、入江を一つ回っただけで、少しずつ変化して伝わっている。そのため、民俗誌を作ろうとすると、おのずから、日本全体のミニチュア版に似てくる。このような、地区ごとの空間的な相違を、時間的な後先に組み直してみること、それを、どのくらい小さな地域で、でき得るか、これは、その可能性を示した、ささやかな覚え書きである。

一、皆鶴姫伝説

日本の海岸線には、必ずと言っていい程、漂着神の伝承があるが、気仙沼地方

にも、海の彼方から流れ着いた神々があつた。大島の久須志神社の由来には、威光を放つ薬師如来を乗せた大亀が網に掛かったという。この大亀は琵琶湖から流れてきたそうであるが、同じ京都から房総の鹿島を経由して、うつわ舟（器舟）―ウツロ舟ともいい、おそらくうつわ舟と連絡があると思う―に乗って流された姫君がいる。名は皆鶴姫、至る所に遺蹟を残した、気仙沼地方の民話随一のヒロインである。

皆鶴姫は、京都鞍馬寺の別当、鬼一法眼の娘、義経に頼まれて、父の兵法書を盗み、その咎で義経を追うようにして奥州へ流される。夢で、このことを知った義経は、気仙沼の海岸で再会する。生きて会えたとも言われるし、また亡き人として出会ったとも伝えられる。

大島へ流れてきた先の話の大亀は薬師如来を乗せてきて、まもなく死んでしまふが、この皆鶴姫は母の形見の観世音像を持ってきて、やはりこの地に葬られる。

薬師如来は現在の久須志神社に、観世音像は現在の観音寺にあるが、この同じような話の型は、二つの伝説に脈絡のあることを感じさせられる。漂着神から貴種流離譚へは紙一重であつた。

平泉に近い土地柄か、かの地に類縁のある伝説が多いのも気仙沼地方の特色である。大島には義経の婿入話があり、山間には、義経の愛馬「太夫黒」の生まれた場所がある。

貴種流離譚の典型は、中納言菅原昭次卿伝である。これは、室町時代の軍記物「村松物語」から出たそうであるが、運命のいたずらで別れた妻子をたずねる型は、「山椒太夫」の話にも繋がっているのである。

二、蛇婿入譚

気仙沼地方には、また、蛇の登場する話が、非常に多い。蛇は龍と同様に、水神様である所から、海辺の特色が出ているとも言えよう。義経の愛馬を生んだ母馬は毎日滝壺に通つたというから、この愛馬の父親は龍神とも思われる。また、気仙沼の漁師の間では、今でも海に金物を落とすと、龍神様の祟を恐れ、その落とした物を描いた絵馬を神社に奉納することがある。

このような龍神（＝蛇）の祟は、太うなぎにも姿を変える。小滝川の小川の主である太うなぎは、彼の諫言を聞かずに、



●現在の葡萄口 門兵衛に追われた大蛇は、ここに沈んだ。

川に毒を流した兄弟に復讐をしている。不思議に蛇が女性であった場合は、人間に危害を加えていないが、これは、おそらく神と人間が同等に立った時代に作られた伝説であるのかもしれない。

義経の婿入話と同様、蛇が婿入を企んだ話も数多くある。気仙沼地方の山奥にある、八瀬の蛇体石の由来譚には、龍（たつ）という名の娘が登場する。黄金を探し歩いている若い男に言い寄られるが、身籠ってしまったお龍は、黄金を見つけ出そうと、糸のついた針をそと男の着物に縫い込んでやる。男は山へ逃げ、お龍は糸を手繰って追いかけていくが、その途中で急に産気づき、蛇の卵を生んで死んでしまう。お龍の目論見は失敗したが、この一本の針は、民話の歴史の中では重要である。この後、人間は神を少しずつ貶めていき逆転劇を演じ始めるのである。何故に龍神が金物を嫌うか、この昔話が、その理由の一端を担っているのではないかと思う。

もう一つの蛇婿入譚は、気仙沼の街中にある化粧坂を舞台としている。この化粧坂は、伝説のセンターでもあって、皆鶴姫も、中納言の妻、玉姫も、この坂に立ち寄って、姿見の井戸という所で化粧を直している。やはり、その坂で機織を業としている娘のもとに毎晩美少年が通ってくる。このことを気付いて心配し始

めた母親は、娘に、糸巻の糸を男に付けることを諭す。翌朝、糸筋を手繰って裏山の穴へ出ると、その中から白蛇がすべり出て来たので棒切れで打ち殺してしまふという話である。気仙沼におけるユニークな地名の一つである、「五駄鱈」の由来は、この話と型がまったく同じで、ただ一つ、白い蛇ではなく、五駄（馬で五頭分）の大鱈であることが違っているだけである。いずれにせよ、水神の受難時代が幕を切って落とされたのである。

三、門兵衛伝説

水神である大蛇を討とうと、積極的に奥山から奥山へと、さまよい歩いた者がいた。一人は前田部落の甚九郎という者、彼は見事に失敗してしまう。確実に大蛇を仕留める主人公を我々は名木沢の門兵衛まで待たねばならなかった。

皆鶴姫が気仙沼の民話の優れたヒロインとするなら、この門兵衛は民話中のヒーローとも言えよう。彼くらい広範に民話中を自由自在に闊歩した登場人物は類をみない。ある所では、話者がフィクションであることを意識した「昔話」として話されるかと思うと、ある所では、実在した人物として信じて語られる「伝説」となっている。その名も文兵衛とも紋兵衛とも書かれるし、水戸藩からの脱藩者とも言われるし、明治初期の頃の人で、実際に会った人もいるというから、おも

しろい。気仙沼のような小さな地域でも、伝承が区々になつてゐる好例である。

さて、その門兵衛、名木沢の奥で大蛇に出会う。得たりとばかりに鉄砲を撃つと、みごとに左眼に命中した。これと同時に大雨が降り、門兵衛を流そうとするが、逆に大蛇の方が押し流され、とうとう海まで出て、大島の葡萄口という所で沈んだ。その後、門兵衛の親戚が大島へ渡る時は必ず、その葡萄口で、さざ波が立つたという。また門兵衛の一族が代々片目が悪いのは大蛇の祟だと言われている。

以上、主に海辺の特色が濃厚な民話を述べてみたが、話型の比較を中心に、地区による相違を時間の流れに沿って組み直してみた。漂着神は貴種流離譚へと通じ、それが神との婚姻譚にもなる。それが何時の頃からか、その神を恐れ、あるいは、反逆を試み始めるのである。ただか民話の中のこととはいえ、宗教観や自然観の推移を推し量ることはできるのである。

現在の気仙沼は、近代化、都市化が進み、河岸も浜も、逐次、コンクリート化され、ふつくらとした色あざやか千鳥の群が飛び立つ風景も見られなくなった。幸か不幸か、我々は自然も神も恐れることがなくなったかわりに、口許からは、床しい民話を永久に失ったのである。